



日時 10月16日(日) 13:30~14:30
 会場 鶴瀬公民館 第3集会室
 講師 吉野 晃氏 東京学芸大学名誉教授
 受講生数 28名



1. タイの山地民族ミエンの暮らしと文化 はじめに

1. 文化人類学とはどのような学問か？

- ・戦前は民俗学：日本民族学会→現在の学会名：日本文化人類学会
- ・ヨーロッパ社会が植民地などでヨーロッパ以外のアジア、アフリカ、アメリカ大陸、オセアニアの住民と接触し、理解する必要

↓

対象とした多くの社会が無文字社会

↓

文化の伝承が口頭、身体コミュニケーションによってのみなされる

口頭、身体コミュニケーションによって伝承される文化（慣習）の研究

↓
生活全般にわたる

↓
現地語を用いて現地人と生活を共にする長期のフィールドワーク（参与観察）
が必要不可欠

理由として現地人は、日常当たり前と思うことは記録に残さないからである

- ・人類学の諸分野
生物的オリエンテーション：人類学の諸分野から



2. ミエン (Mien) とその環境

ミエンは中国から大陸東南アジアに分布する山地民族

- ・中国：ヤオ族、ベトナム：ザオ、ラオス：Yao、タイ：Yao、Mien
以上のヤオ族、ザオ族の中にミエンは分類されている。
様々な言語、文化の民族がひとまとめにされている。
自称ではなく他称。
- ・大陸東南アジア：ミエンが暮らしてきた場所は、複雑な地形
中国 5 5 民族、特に雲南省に 2 2 民族
言語、生態的、文化の多様性、特にラオスの場合を例示
ミエン語派の言語話者の分布：国境を越えて広がりがある。

ミエンについて

- ・ミエンの人口
中国：88万4千人（1999年代）ベトナム：約35万人（1999年）
ラオス：約3万人（2000年）タイ：約4万8千人（2002年）
アメリカ：推定3万5千人（ラオス難民として移住）他カナダ、フランスにも居住。
全世界で推定約130万～140万人（2000年代）
- ・ミエンの移住
数か国にわたる広い分布域が生成されたのはベトナムへは16世紀、タイへは19世紀後半と推定されている。
漢字で書かれている祖図（ツオウトウ）を見ると所持者の先祖たちの大雑把な移動経路が分かる。移動途中で亡くなったりして墓の所在はわからない。漢字で書かれた図表参照。
- ・ミエンの移住は家族ごとで経路も複数あった。

- ・彼らのしてきた焼畑耕作では移住の繰り返し→徐々に分布域は広がる。

3. ミエンの生業 焼畑耕作 雑穀

- ・日本でも30年代にみられたが、ミエンも耕地の場所を「切り替える」農耕で、植生の遷移に依存している。

定着的焼畑耕作民

- ・綿密なローテーションに基づいて休閑期間を管理。一定人口の集落周辺ではかなり長期間継続することは可能。
- ・タイ北部では標高が低いカレンやラワなど。

開拓型焼畑耕作

- ・各家族の判断で適宜森林を切り開く
- ・タイ北部ではミエン以外にも他民族も行ってた

1988年当時の焼畑耕作のパターン 作物、休閑期間について

- ・作物は自給作物、換金作物の二本立ての経済
タイ、ラオスでは換金作物として当時合法だった阿片ケシを盛んに栽培。1958年に法的に禁止、70年代取り締まりも強化。

焼畑の終焉

1989年商業的森林伐採禁止令。そのため、常畑（定着型）耕作に移行。

4. 焼畑耕作と村落の再編成

- ・移住が重なって村の人口が急に増加。
- ・村からより離れた遠隔地に畑を開く。
- ・耕地近くに出作り小屋を建て、そこに寝泊まりして耕作する。
- ・小屋群が徐々に常住の村落に成長していく。
- ・一方、人口の増えた集落を見限り、他の村落に移住して行く者もいた。

移住の途上では局地的な紛争、軋轢で移住をもたらしたこともある。

タイ1960年後半から70年初めにかけて内戦を避けるために移住が頻繁に行われた。→内戦などにもすぐに対応して移住可能。だから焼畑耕作。

ミエンの「村落」は移住を常とする人々は一次的に集住している場であった。

タイの事例で言えば、やってきた移住者を拒否する、移住を制限するといった規制を課すのが難しい。



5. ミエンの社会・家族

家族と親族

- ・親族組織は父系出自を理念としていて漢字の姓を有し、名前も漢字名を持つ。姓は原則父系で継承。

ピャオ（家、家族）

- ・同じ家に住む家族（ピャオ）が最大の自立的集団、ピャオはかつて父系で合同家族が理想的な家族構成とされていた。
- ・近年核家族化の傾向にある。

婚姻

- ・タイのミエン：高祖父を共にする父系家族＝外婚単位
- ・婿養子のような終身妻方居住もある。ピャオの系譜の実際の構成や姓による純粋な父系とならない場合がある。

養子

- ・タイのミエン社会ではしばしば養取（養子縁組）が行われる。
- ・他民族からも養取する。
- ・かつて阿片ケン栽培で現金収入が多かった時代は、多民族から多くの養子を多くとっていた。

他民族出身の養子

- ・1960年代後半では同世代人口の約1割が他民族出身の養子と推算した。近年では事例が少なくなっている。
- ・しかし、ミエンに関して家が「民族の血」などといういい方は成立しない。では何が彼らの民族アイデンティティの基盤かという先祖祭祀を基盤

とする儀礼体系。

親子関係が儀礼的に繰り返され認知される仕組みになっている。

6. 宗教：ヤオ道教

ミエンは漢民族との接触が長かったために漢族文化の影響が強かった。

古くから漢字を用い、姓名・〈家先単〉・〈祖図〉・経典・儀礼文書・契約書など漢字で書いていた。

ヤオ道教

ミエンの宗教：固有のアニミズムと道教・法教の習合、正一教に加え、閩山教・梅山教といった呪術性の強い法教の影響も確認される。

儀礼の場：特別な廟でなく、主催単位は個別家族で、基本的に個人宅。

祭司のランク・祭司の数：下のランクで〈設鬼人〉程度の儀礼知識は1980年代で40歳以上の男性の半数が習得、儀礼を主催できた。

漢字学習：ミエンの集落で金を出し合い、漢民族の教師に教えてもらった。祭司は兼業神主のような存在

シャマン：別物

祖先祭祀儀礼：頻度の高い儀礼 〈家先〉の儀礼名を記した祖先簿＝家先単（チャーフィンタール）資料あり

成人儀礼〈掛燈〉（クワーターン）ミエンの男子の成人儀礼（イニシエーション）儀礼的位階を決める。

収魂儀礼

- ・ミエンの収魂観では、人間の各部分を司る十の魂が離脱可能、それ以上の説もある
- ・魂が身体を離れてしまうと、その魂が司っていた身体部分に不調が生じる。
- ・儀礼を行って離脱した魂を身体に戻す。
- ・魂を取り戻す儀礼は多数ある。よく行われるのが橋のレプリカを作り、その橋を渡って魂が戻るようにする〈架橋〉儀礼である。
- ・儀礼が終わっても橋のレプリカは放置するのでミエンの村落周辺には、橋のレプリカをいくつも見る事ができる。

7. 民族間関係 interethnic relationship

- ・動態：民族境界の変化
- ・同化：なりすまし

- ・文化：新たなカテゴリーの生成
- ・民族間関係＝民族間のコミュニケーション：交換、共生、軋轢、序列、階層
- ・民族間のコミュニケーション：共通するネットワークと観念の共有
- ・民俗的共生・社会的共生
- ・交換・コミュニケーションの制御

大陸東南アジア、タイではコミュニケーションをとる。

本来の「共生」の定義（狭義）

- ・生態学から導入した概念
- ・社会的共生
- ・民族的共生→現代の民族間関係にも応用できる。
- ・重要なのは、「相互に干渉しあわない」点である。要するに「付かず離れず」。集団間の関係として認識されている。

ミエンの民族間関係

- ・ミエンは中国にいたときから、マジョリティに対して狭義の民族的共生の戦略をとってきた。
- ・漢族とは付かず離れず、交換とコミュニケーションを積み重ねることで、漢字や道教儀礼などを受容、一方で漢族へは山林産物（木材、キノコ、薬草など）を供給。
- ・民族境界を超えた多様な個人関係。義兄弟、養子など。
- ・こうした戦略は東南アジアに入っても同様。（客家）
- ・平地のタイ系民族との調和的關係⇒マジョリティに順応しながら、一方で強力な民族的アイデンティティを維持。制度的友人関係、養子。

吉野先生のフィールドで観察されたミエンとタイ族の異民族交換・コミュニケーション（共生とアイデンティティ）を図表参照。

8. ミエンのこれから

- ・家の独立性の強さなどは移住生活が大きい。
- ・道教色の強い儀礼体系を維持しているのはその文化の特徴の一つである。
- ・ミエンは焼畑耕作に伴う移動で、その文化を変化させ、物質文化の側面では多様性の幅が大きい。
- ・移住生活も、各国で終焉を迎えつつある。定住化政策も施行。
- ・膨大な儀礼知識の伝承も危うい。人口が流動化して後継者がいなくなりつつある。

